

# 農産 F A X 情報 第 11 号

令和 5 年 10 月 15 日  
ゆとりみらい 21 推進協議会 指導部会 幕別町忠類地区

## 1 有機質肥料の散布・臭気対策

- ・たい肥の散布は、硝酸態窒素の地下水への流亡を抑制するため地温が十分低下した 10 月中旬以降に散布しましょう。遅くとも積雪や土壌凍結が入る前に終わしましょう。
- ・散布後はすみやかに耕起し、たい肥を土壌と混和しましょう。

## 2 秋まき小麦

### ○雪腐病の防除

- ・薬剤散布後に降雨があると防除効果が低下する恐れがあります。降雪が始まる 11 月中旬をめどに薬剤散布を行いましょう。降雨により再度散布する場合は、使用回数に注意しましょう。

表 1 雪腐病の防除薬剤例

薬剤名	系統	希釈倍率 (倍)	使用時期 (収穫前日数)	使用回数 (以内)	大粒 菌核病	黒色小粒 菌核病	褐色小粒 菌核病	紅色 雪腐病
トップジンM水和剤	MBC	2,000	根雪前	3	○	—	—	—
フロンサイドSC	他合成	1,000		2	○	○	○	○

※トップジンM水和剤は赤かび病、うどんこ病、眼紋病にも登録があるため、本剤の使用を計画する際は使用回数に注意しましょう。

## 3 てんさい

### ○収穫後の注意点

- ・収穫物をほ場に堆積する際は、シートで被覆し乾燥・凍結を防ぎましょう。また、晴天時はシートをはがして通気しましょう。
- ・収穫後の茎葉は速やかにすき込み、腐熟を促進しましょう。

#### 4 小豆の落葉病対策（次年度以降の作付に向けて）

落葉病の発生・拡大を防ぐため、茎葉残渣のたい肥化・輪作の見直しなど計画的な対策を検討しましょう。

##### ○病徴

- ・8月中下旬ごろから萎凋し始め、下位葉から上位葉に向かってしおれ、やがて全葉が萎凋します。葉柄を基部から折り取ると茎の内部が褐変しているのが特徴です。

##### ○多発しやすい条件

- ・連作頻度の高いほ場で発生が多く、罹病残渣が多くなることによる密度増加が発生拡大の原因と考えられます。また、ダイズシストセンチュウの加害によっても被害が激化しやすいです。
- ・高温年に比べ、低温年に早期出現し、褐変の伸展も速まります。

##### ○対策

- ・伝染源の主体は罹病残渣であるため、被害茎葉はほ場から持ち出し、完熟たい肥化することが望ましいです。
- ・輪作体系に「とうもろこし」「ムギ類」を積極的に取り入れ、輪作年限（栽培間隔）を5年以上空けるようにしましょう。
- ・えん麦野生種の栽培により発生が軽減する知見があります。小麦後作利用でも効果が期待できるため、緑肥の積極的な活用を検討しましょう。

表2 えん麦野生種の栽培例

緑肥	（は種量 kg/10a）	施肥量(kg/10a)			（は種時期
		窒素	リン酸	カリ	
えん麦野生種	15	5	5	0~5	春播き：5月中旬まで 夏播き：8月中旬まで（小麦後作利用）

※家畜ふん尿・スラリーを化成肥料に代替え可。

※土壌診断でリン酸・カリが過剰な場合は、窒素のみ施用。

※えん麦もち病の発生が甚大であったほ場での栽培方法については、農協または普及センターへご相談ください。

収穫作業時の機械調整は、**必ずエンジンを停止してから！**

農業機械の格納時は十分に洗浄し、**土壌伝染性病害の拡大防止！**

日没が早くなっております。**早めのライト点灯・反射版の取り付けを！**